

「国とちからと栄とは限りなくなんじのものなればなり」

主の祈りにおけるこの部分は、私たちが使う新共同訳、口語訳には記されていません。新改訳のタイによる福音書6章13節の後半部分の()の中に書かれているが、その注のところに「最古の写本ではこの句は欠けている」と記されています。

多分、主の祈りを礼拝で共に唱えられていく中で、後になって付け加えられたものとして考えられています。祈禱文に頌栄を付けるのは、ユダヤ的な伝統で、そのような習慣が受け継がれていたことでしょう。

この部分は、主の祈りの締めくくりとしての讚美であり、信仰告白です。終わりの部分でありながら、主の祈りの初めの部分に通じるもので、信仰者としての姿勢を示しているのです。私たちの祈りは、自分の欲を求めるのではなく、父なる神様の御業を讚美し、神の国と義を求める者として立てられています。そして、そのような者は、父なる神様がすべてをご存じであり、必要なものを与えてくださるという信頼をもって祈りをするのです。

「国」「力」「栄」はイスラエルの歴史の中で、奪われることがありました。ですから、「かぎりなく」、代々に渡ってという願いは、イスラエルの民にとっては具体的で、切実な祈りでもあったのです。歴代誌上29章11～13節に、イスラエルの前会衆の前で主をたたえるダビデ王の祈りがあります。「偉大さ、力、光輝、威光、栄光は、主よ、あなたのもの。まことに天と地にあるすべてのものはあなたのも。主よ、国もあなたのも。あなたはすべてのものの上に頭として高く立っておられる。富と栄光は御前にあり、あなたは万物を支配しておられる。勢いと力は御手の中にあり、またその御手をもっていかなるものでも大いなる者、力ある者となさることができる。わたしたちの神よ、今こそわたしたちはあなたに感謝し、輝かしい御名を賛美します。」主と共に歩んだイスラエルの民の信仰告白でもあります。

そのような祈りはヨハネの黙示録4章11節においても「主よ、私たちの神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、御心によって万物は存在し、また創造されたからです。」と記されていて、これは聖書全体が示している祈りの基本であります。

創造主であり、私たちの救いのために独り子を与えてくださった神様を父と呼びかけ、ほめたたえる祈りこそ、試みと誘惑が多いこの世の中にいながらも、永遠のみ国に生きる人の希望であり、勝利の宣言であるのです。

*共に祈りましょう。

- ・父なる神様が支配して下さるみ国に生きる恵みに感謝し、神様をほめたたえましょう。
- ・神様の力と栄を証しする神の民の共同体として海老名教会が祝されますよう祈りましょう。
- ・試練の中でも、勝利をもたらして下さる主に感謝し、喜びの歌をささげましょう。